大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第四十四卷　第六號

昭和十二年六月一日發行

論叢

現實利子の問題……文學博士　高田保馬
現下の土地問題と農地法案……經濟學博士　八木芳之助

時論

輸入統制に伴ふ『割當利得』の問題……經濟學博士　谷口吉彦

研究

德川時代の夫役に就いて……經濟學士　堀江保藏
經濟社會學序說……經濟學士　北野熊喜男
ルーテル經濟觀の特質……經濟學士　澤崎堅造
大都市交通の特性……商學士　小泉貞三

說苑

ロオゼンシュタイン・ロダン「一般的貨幣論と一般的價格論との同格化」——資本組織の有機的變化と平均利潤率との關係……經濟學士　飯田藤次
都留學士に答ふ……マスター、オブ、アーツ（ウイスコンシン大學）　都留重人
シュラムの比較生產費說……經濟學士　柴田敬
キャレル氏保護關稅と就業……經濟學士　松井清
……經濟學士　岡倉伯士

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題
本誌第四十四卷總目錄

（禁轉載）

ルーテル經濟觀の特質

澤崎堅造

一

ルーテルの經濟觀は、先述の如く[1]、大體商業論と農民戰爭論とから成つてゐるが、その論旨は前者に於ては積極的・指導的であるのに對して後者は極めて消極的・否定的である。これには色々な事情があることであつて一概に簡單にその理由を擧げることは出來ないが、とに角この兩者には非常なる相異があるといふことは明かである。それについて、ルーテルは當時の時勢に動かされて意識的に、勃興し來る商人階級に好意を寄せたのであると簡單に結論してしまふものがあるけれども、私は必ずしもさうではないと思ふ。もつと根本的に彼の思想の根底を窺ふことによつて初めて幾分の理解が得られると思ふ。少くとも彼が容易に時勢に動かされるやうな人物でなかつたことは明かである。否、むしろ或る意味ではそれに反對しようとさへする性格の人であつたといふことは、彼が初め大學に於て法律を學んだが、そこに流るゝ當時の輕佻なる文藝復興の氣風には強く反對し、後に中世的修道院の奥深く歸へり行いた原因の一つとなつたとされるのを見てもわかると思ふ。

とに角ルーテルの如き偉大なる殊に宗教的人物の文化觀について觀るには、どうしてもまづ彼の根本的思想、彼の生そのものに深く這入らなければならない。そこでまづ彼の人間觀、社會觀及び歴史觀とも云ふべきものに

1) 本誌二月號所載「ルーテル經濟觀の基礎」參照。

ついて、そこに彼の考へ方の特徴を探つて見たのである。そしてまづ彼の「二つの秩序」とでも云ふべき考へ方が、對立的・批判的であり乍ら同時にまた靜態的なものであると云ふことが、他のも一つの考へ方たる「三つの秩序」の方法のその發展的・綜合的にして同時に動態的なるものゝ一部をなすのであると云ふことがわかつた。そこで我々は再び彼の經濟觀に歸へり、それらの方法によつて如何に彼の特徴を摑むことが出來るかといふことを試みようと思ふ。そうすることによつて、まづ我々は農民戰爭論に於てはその前者たる「二つの秩序」の方法によつてゐることがわかり、商業論に於てはその後者たる「三つの秩序」の方法によつてゐることがわかるであらう。そしてなほ、商業論に於てこそ彼の思想全體の特徴が、より良く示されることをも知り得るわけである。成る程商業論に於ては、その現實の姿に對しては、それを徹底的に批判し、惡存在に對してはまた糾彈極めて嚴しいものがある。併しそれにも拘らず、全體として綜合的であり、從て是認的であることの理由が明に示されるであらう。

そこで以下なほ少しくそれら二つの方法を明かにし、それによる彼の經濟觀の特質を概括して見たいと思ふのである。

二

(1)二つの秩序(秩序的經濟)――彼が農民戰爭に於て示した態度は、殆んど全く農民に反對したと云つて良い。むしろ故意に、反對せんがために反對したとさへ思はれる。相手の缺點をのみ追求して、採るべきところをも顧みようとはしなかつた。この彼の態度は農民戰爭の進行と共に益々著しくなつて行つた。かの「十二箇條」の批判

に於ては、第一條の教會の自治と福音の自由に贊成したのみで、後は全部反對したか又は無關心の態度をわざと示した。例へば、十分之一税の餘分を以て貧民救濟に用ひられたいといふ要望に對しては、それは納税者の財産を脅し、盗みをするに等しいとのみ云つて反對し、農奴解放に對しては却てかゝる規範の中にありながら眞に心の自由を得ることこそ眞の自由であり解放であるとのみ云ひ、また經濟的自由の要求に對しては關心を示さず、專ら法律、裁判に依るべしとした如くである。これは確にルーテルの極端なる性格を現し、採るべきところをさへ故意に顧みなかつたが故に、一層彼の眞意が了解せられず非常なる誤解を生じたのも故なしとしないのである。なほ農民の逆殺について、自らを辯護した如きは殊に彼の人望を落してしまつたわけである。そして晩年には、わざと諸侯に接近し、小市民としての生活を樂しむが如き態度を示した。これは如何なる理由に基くのか。恐らく彼の眞意は、農民戰爭に於ける民衆の態度に失望し、終末觀的考へ方に殊に強く執へられたのであらう。從て彼は些末なる論議の末や徒らなる反抗の狂奔を離れて、もつと人生の根底から達觀して靜かに現實的なる社會の秩序性を重んじようとしたのではないかと思はれる。

彼が農民に對して暴動を警め權威への服從を薦め、反對に統治者へはその法と劍とに責任あるものとしたことの餘りに强硬なるを見て、彼が初め福音の宣明と信仰の自由のために、羅馬教皇にさへ敢然反對したときの態度と比較して、矛盾せざるやの感を持つものが多い。けれども、この秩序を重んずるといふことは全くルーテルの根本的な考へ方たる「二つの秩序」によつて自ら出て來るのであつて、從てこれを明かにすることによつて初めて敍上のことが理解せられるのである。

彼は現實的社會秩序については、神の國と相對して次の如く云つてゐる――「神の國は惠みと溫き心との國である、怒りや罰の國ではない。何となれば、それは自ら赦し、美、愛、尊敬、慈善、平和、喜樂なのであるから。けれども現世の國は怒りと眞劍の國である。何となれば、それは自ら惡を制御し、眞面目なものを保護するために罰し、防禦、裁判、判決等を行ふものであるから」[1]と。更にかゝる現世的統治の統治者については、その權威は神の統治の代理なのであるからその重責を畏れなければならない。「領主達よ、神のわざとして行へ」[2]とある如く。かくて現世的統治の態樣は法と劍とによつて秩序よく保たるべきものである。そしてこれを行ふことが統治者たるものゝ權利であり義務であるとする。かゝる意味からして惡しき者には嚴罰を下し、徒らに慈悲的であつてはならないとさへ云ふ。「現世的政府はその本職に於ては溫き心ではあり得ない」[3]、「いまは忍耐の時でもなく、慈悲の時でもなく、劍または怒りの時である」[4]とさへ云つてゐる。かくて要するに、統治者はその義務としても神の怒りに先んじて法と劍とを打ち振ふべきである。[5]人民に對しては從てそれだけ徹底して服從を薦めたのである。農民が直ぐ權力者に反抗し秩序を亂すべきではないとした所以である。「政府を尊敬せよ」[6]、また「權威への反抗は聖書的ではない。また自然法にも反す」[7]とは繰り返して述べられてゐる、そして彼はなほ、假令統治者が專制者であり惡しきものであつても、それに對して直ちに反抗の劍をとるべきではない。やはり寧ろ服從の途を選び、盡すべきを盡し、神の怒りに俟つべき態度がなければならないとした。その忍耐と服從さとは、これをカトリックの聖トマスに比較しても、[8]またプロテスタントのカルヴインと比較しても、[9]なほルーテルの方がより徹底してゐると思はれる程である。

1) Ein Sendbrief von dem harten Büchlein wider die Bauern 1525, L. A. VII, S. 365.
2) Ermahnung zum Frieden auf die zwölf Artikel der Bauerschaft in Schwaben 1525, L. A. VII, S. 313.
3) Ein Sendbrief, S. 366.
4) Wider die morderischen und räuberischen Rotten der Bauern 1525, L. A.

何故彼は此くまでも徹底して服從すべきを薦めたのであるか。それは先きに示した如き生の構造に關する彼の根本觀によること明かである。現實の人間の生に對する彼の如き深き絶望觀、存在自體が全く惡そのものであり、神の怒りを俟つに適しいものとすることによる。我が欲するところの善はなさず、却て憎むところの惡はこれをなすなりと云ふ人間觀に立つ。從て意志の自由に對する否定に初まる。從て人間は存在自體から本來他律的なものであるとする最近の考へ方は正に、この間の消息を一面的に强調したものである。ルーテルの社會觀が、かゝる徹底せる規範性・秩序性を持つものであると云ふことは、商業論に於てもよく現れてゐることは前にも述べた如くである。現實の商業が如何に根深く罪惡に充ちたものであるかを嘆き、商人にして惡人でないものは殆んどないとさへ云つた。從てかゝる商業社會に對しては統制ある秩序ある制度の發展が望ましいとしてゐることの理由もわかるのである。

併しこゝに附言して置かなければならないことは、彼が外的生又は政治的・經濟的社會について此くの如き權威と服從とを解いて秩序的なるべきものとしたにも拘らず、なほ、そこにはその手の及ばないところがあるとした。即ち異れるも一つの社會——神の國又は教會があることを彼は他面に於て殊に强く主張してゐる。これは現世的統治の原理とは異るところのものによつて立つ——即ち愛と信仰に基く慰安と希望の世界である。そしてこの世界からして人々は眞なる自由の何たるかを知らしめられその經驗を與へられる。それは全く「啓示」によることであるが、とも角もかゝる社會より出で來れる人々は外的なる秩序性の中に却て積極的なる奉仕と忠誠をなし得る。愛の本質とは蓋しかくの如きものである。即ち、外的生活に於ては全くよき秩序と統制の中にありなが

VII, S. 350.
5) Eine treue Vermahnung zu allen Christen, sich zu hüten vor Aufruhr und Empörung 1522, L. A. VII, S. 211.
6) a. a. O. S. 212.
7) v. zwölf Artikel, S. 320.
8) 上田辰之助博士譯「聖トマス經濟學」二八六頁參照。

ら、その中にあつて人々は却て進んで積極的なる奉仕をばむしろ喜んでなすのである。[9] 從てかゝる生活の具體的なる全體は「自由なる秩序」となり、「喜べる服從」の世界を現出する。これは決して稀なる、あり得べからざることではない。愛の世界とは常にかうである。子供を養ふ母親の如く、外には如何にも汚れて卑く見えることでもあれ、内には湧き出づる自由と喜びに於て、自ら進んでそれらをなすのである。君君たらずとも臣臣たるべく親親たらずとも子は子たるべき世界がこゝに初めて現出するのである。しかしこれらはなほ「二つの秩序」の世界だけでは、よく了解することは出來ないところである。

(2) 三つの秩序(よき經濟)――ルーテルの考へ方の第二の特徴として「三つの秩序」があることは既に述べた如くである。これはルーテルの根本的な且つ綜合的な考へであつて、第一の方法よりもなほより具體的でより發展的なものである。何となれば「二つの秩序」に於ては、人間生の矛盾・對立の故に社會もまた國家と教會との關係となり、從て國家の本質は取締りを主とすることゝなり秩序的でなければならないとした。けれどもかゝる考へ方だけではまだ不十分なのであつて、眞に具體的・全體的なものを示してゐるとは云へない。「二つの秩序」の世界は現實のものを指すだけであり、從てそれは靜態的な一面を示すだけである。そして現實だけがものゝ眞の姿を示すのではない。それ以前に創造の生があることを知らなければならない。創造とは神なる絶對的統治者の意志によつて創造されたといふことで、そこに於ては凡てを賜物とするのである。與へられたものとしての生の世界は、神と共に一つなる全く自由なるものである。けれども人間はその自由の濫用によつて創造者への反抗をなした。そこに神と人との分離を生じ從て人間の中に於ける矛盾と對立とを生ずることゝなつた。然るにかゝる現

9) J. Calvin; Institutes of the Christian Religion trans. by Allen 1930, II, p. 663.
1) Von der Freiheit eines Christenmenschen 1520, C. A. I., S. 341 f.

實に對してなほ絶對的統治者としての神は啓示を現すことによつて、そこに和解の途を立て、かくて最後の段階たる榮光の世界への全き希望の中に入れられた。かゝる生の經驗からして彼の「三つの秩序」の考へは生れた。從て所謂「二つの秩序」の世界はその一つの段階に過ぎないのであつて、更にそれは前にも後にも續く發展のあるべきことを示さなければならないのである。

そしてこの「三つの秩序」なる綜合的考へ方が正にルーテルの商業論に於て特によく示されてゐると云ふことは前にも述べた通りである。商業論に於ても勿論「二つの秩序」の考へ方が全篇を貫いてゐて、從て批判的であり鋭く否定的なところさへある。そこでやゝもすれば、彼は商業それ自身を全く排斥してゐるかの如く見られるのであるが、實はさうではない。たゞ現實存在の姿を指して云つてゐるのであつて、その根源に於てはすべて神の創造によるものとして卽ち賜物としての善性を認めてゐるのである。商業自身が現在如何に惡しきものであつても本來必ずしもそうなのではない。人間にとつて必要なものである。然るに現實の人間が惡しきが故に、これら凡てを惡用してしまふと云ふのである。故に當時の金融機關や利子などについても彼は進んで推薦しまた指導的にこれを紹介してゐるのである。彼は斯くものゝ創造性といふことに於て凡てを是認せんとし、その本質へ歸へさうとした。故に現實の惡にも不拘、なほ彼は望みを捨てない。殊に人間生の「啓示」による發展に基いて、社會もまた新しく見直されなければならないとした。かくて彼は商業に對しても「よき商業」へと歸へさしむべく否、榮光へと發展させるべき途を備へたと云はなければならない。

かくて三つの秩序に於ける創造の重視といふことは、物の價値について新しい寄與をなしたとしなければなら

ない。卽ち個々の事物の絕對的價値と云ふことである。創造の世界に於ては、凡てのものは與へられたるものとなり神の賜物であるとなることは、やがて凡ての個々物に夫々としての絕對的價値を附與することになる。かゝる考へは基督敎に於て一般に行はれてゐるところであるが、カトリツクに於ては然し乍ら寧ろその價値を或る目的に向つての手段としてしまひ、犧牲的なる意味にとつてしまつた。從て創造に於ける價値は絕對的なものではなく常になほ相對的に、目的的にのみ考へられる。そしてかゝる考へ方は現代に於ては最も普通なものとなつてゐる。けれどもルーテルに於ては違ふ。彼は、創造に於て與へられたるものは個々物として凡べて夫れ自身の絕對的價値有りとした。彼の「召命としての職業」觀も亦かゝるところから出づるのである。併しいまそれらの點について述べてゐることは出來ない。けれども兎に角、眞に生き生きとした世界を現出せしむるためには極めて重要なる要素であると思ふ。啓示に基く愛の働きとは、蓋しこの理無くしては全く不可解なことである。かくてよき社會、よき經濟は、かゝる創造的・絕對的價値の發見と附與とにあると思ふのである。

要之、ルーテルの考への特徵として擧げたる此の「三つの秩序」は、旣に述べたる「二つの秩序」のより發展したるより綜合したるものであり、彼の思想の全體を示すものであるとしたいのである。そして農民戰爭論は主としてその後者の方法により、從て對立的・批判的であるのに對して、商業論はその前者の方法による。從て商業論の場合の方がより具體的でより發展的で、且つより綜合的に彼の思想を表現したものと觀ることが出來る。そしてかゝる考へ方から導き出されたる彼の經濟觀は、第一には「二つの秩序」による對立的・批判的方法による秩序的經濟觀であり、第二には「三つの秩序」による創造の重視による絕對的價値の附與に基くよき經濟の觀

方とも云ふべきものを持つ點に於て特徴があると思ふ。

三

(3)生としての經濟――農民戰爭論に於ては反對的であり、商業論に於ては好意的であるといふ矛盾は、右に述べたる彼の考へ方の理解と、それに基く彼の經濟觀の特徴を識ることによつて初めて完全に了解することが出來る。即ち農民戰爭論の趣旨は彼の考へ方の一部を强調したものであつて決してその全面を示したものではない。彼の全體的な方法の提示は、寧ろ商業論に於てあるといふことになつた。かくの如く彼の思想も表現も共に極めて分裂的で矛盾に充ちたものであるにも不拘、彼の思想の根底になほ彼の生の經驗の中に深くは入ることによつてそこに一貫せるものがあることを知るのである。凡そ表現と生との關聯も亦此の如く複雜微妙なるものであらうと思ふ。そこで彼の經濟觀はまことに「生としての經濟」の典型的なるものとなり、その意味で以下少しく概括的に彼の特徴とするところを明かにして見たい。

(イ)生の對立と發展――ルーテルは生の構造について、現實は常に矛盾と對立とであるとする。これ彼の深く體驗したるところであつて、基督教に於て長く執つてゐるところでもある。この考へをば例へばディルタイのそれと比較して見よう。[1] ディルタイは精神科學の基礎付けとして、生をば心的物的統一體としての個なる人間に於てその出發點と聯關とを見出さうとしてゐる。而もその生命統一體としての人間をば、常に統一ある全體として見且つそれを直接的にして調和的なるものとなし、從てそこには內的にも外的にも破綻を少しも經驗してゐない。生命の內容をば極めて複雜なものとはするが、而も單に「不可測性のもの」[2]とするに留つてゐる。生の內容を神

1) W. Dilthey ; Gesammelte Schriften I. 1923, S. 28 f.
2) a. a. O. S. 29.

祕的なものとはしてゐるが、その構造を更に深く追求してゐない。反之、ルーテルは生の內的構造を宗教的經驗に於て極めて深刻に見極めてゐる點に於て實に古今稀れに見る程のものであつたが故に、多くの宗教的天才にも立ち勝つて人間の內的矛盾とその悲慘さとに直面し、寧ろ絕望の感をさへ持つたのである。生の構造を單に複雜とか不可測性とか更には神祕的とか云ふに留らない。內なる空しさを外に裝ふものとして、我が欲するところの善はなさず却て憎むところの惡はこれをなすところのものとして見出した。現實の人間は、かく內と外との全き矛盾と對立に於て出來てゐるとする。なほまたディルタイは、生の內容をば豐富なものとしてこれを稱へるが、ルーテルはむしろ反對にその空虛さとその缺乏さとを訴へる。自らに善と思ひ力と見えることの、却てそれが惡であり僞善であり眞なるものゝ缺如を見出すばかりである。またディルタイは人間並に社會をば自然との連關に於て見るに當つて、それを直接的に、連續的に見てゐる。けれどもルーテルは寧ろ人間の生をば眞の自然とは相反するものとして、現實のまゝでは自然とは相容れないものとしてゐる。故に現實的生はこれを規範的に秩序的に取締るべきものであるとした。更にディルタイは、社會又は歷史の發展について、自然との連續的關係からして逐次的に次第的に發展をなすものとした。從て全體として調和的にして直接的な考へ方をしたのであると概括されるのである。けれどもルーテルのは、それとは反對に、對立的な間接的な考へ方をしたのであるとすることが出來る。

（ロ）愛の裏付——現實の人間の生が、かゝる矛盾・對立の構造を持つたものであるとする考へ方について、或る意味で特に强調したものとして最近の危機神學の思想がある。いまその中で特に社會問題について强い關心を持

つゴーガルテンについて簡單に述べて見よう。[1] 彼も亦大體に於てルーテルの考へと同じく、生の構造をば全く分裂と對立とに於て、寧ろ虚無的な本質を持つものとしてゐる。人間は自らは本來空しきものにして從て他律的にのみ存在するものである。他律的權威によつて初めて眞の發展も活動もなされるのであるとした。これ正にルーテルが現實的生について殊にその外的生について、それが規範的でなければならないこと、秩序的なるべきこと服從を尙ぶべきことなどを敎へたのと相似てゐる。兩者とも外的權威又は規範に對してよく服從することによつて秩序を保つことが出來るとなし、そこに於て眞の自由が存するとする。これルーテルの農民戰爭論に於ける論調である。けれどもそこには大きな差異がある。ゴーガルテンの服從には喜びが無い。その自由とは、たゞ秩序そのものゝ故にである。[2] けれどもルーテルのは、「喜べる服從」であり「自由なる秩序」である。それは何故か。ルーテルのは內と外とを嚴別しながらも、內なる生より與へられたる贖罪の愛とも云ふべきものは、外なる生の秩序の中によく服從し、進んでそのために奉仕と忠誠をなし得る所以を持つてゐる。內と外とを峻別しながらも、なほそれを表裏の如く離すべからざる關係に於て持つてゐるのである。かくて服從の姿、秩序を尙ぶ姿は兩者相似てゐるが、併しその力、その潑剌さに於て遙かに違ふと思ふ。敵を愛し、患難をも喜ぶ[3][4]といふ不思議なる愛の世界の消息をよく識ることなしには、規範と秩序の中に寧ろ喜んで進んで奉仕をなし忠誠を盡し得る所以はわからないであらう。

この點について更にゴツトルの思想と比較して見よう。[5] ゴツトルは、經濟をば生の根本構造と關聯してこれを理解し得るとなす點に於て、確にルーテルに近いものを感ずるが、併しゴツトルは生の構造をばたゞ平面的な連

1) F. Gogarten; Politische Ethik, 1930.
2) a. a. O. S. 182 f, 210.
3) マタイ傳 5:44
4) ロマ書 5:3
5) 福井孝治教授著「生としての經濟」參照。

關に於てのみ見ようとするのであつて、ルーテルの如く生の現實を超へてなほ創造と榮光との三段階に發展した る形に於て、云はゞ立體的に見てゐるのとは違ふ。意欲と行爲との連關に關して和合、對立及び矛盾の三つとなし、それに從て愛と權力と欲求調達の三つの關係を生じ、更にそれはまた共同と權力と經濟との三つの社會を齎すのであるとしたにも拘らず、[1] 最後の經濟社會がたゞ第二の權力社會との聯關としてのみ考へられたがために、全體の思想が極めて權力的なるトーンを持つことゝなり、宛ら權力的經濟社會なるものゝ基礎付けをしてゐるやうに思はれる。これは正に生の構造について考へた際に、まづ意欲を以てその中心としたところに原因すると思ふ。ルーテルの如く、意欲と共にそれと對立するところの愛をば裏付けないことに原因するものと思ふ。またゴツトルの生の發展についての考へ方に、運命によつて支配せられるとする考へのあるのは、確にヘレニズムの影響である。從て生のより本質的なる、より具體的なる發展の姿を認識し得ない。人間の生の發展はたゞ運命によつて波間に漂ふ如きものではない。人間の意欲を中心として考へるときには常に然ならざるを得ないのであるが、ルーテルの如く愛の裏付けに於て見るとき、神の秩序の中に豫定されたものとして見るが故に、たゞなる運命とか神祕とかいふ不確定なものではなく、もつと明確なものとすることが出來るのである。

（ハ）神の秩序――生の發展を神の秩序の下にあるといふ點を强調するのは基督教一般のとるところであるが、更にその點についてカトリツクの見方とは如何に違ふかを明かにして見よう。例之、聖トマスに於てはヘレニズムの影響が極めて大であるからして大體に於て調和的で自然的で且つ連續的な觀方を以て貫き、從てまた全體をば目的的に統一して居るといふ特徵を齎した。[2] これ正に神の統一と云ふことに歸するのである。かゝる神の意志を窮

1) 同上八六頁以下
2) 上田辰之助博士譯「聖トマス經濟學」二六七頁以下參照。

極的に置くと云ふことはヘレニズムには無いことで、從てヘブライズムの特徴である。併しこれを更にルーテルと比較して見るならば、この神の意志が常に全體的にまた直接的に統一的に行はれてゐるとする聖トマスの思想とは違ふ。卽ち神の意志は必ずしも常に直接に人間の歷史を動かしてゐるものではない。人間の歷史がそのまゝ神の意志の現れだとすることは出來ない。神はその全體的な總括の中に、人間をして或る程度自由に歷史の中に歩ましめるのである。併し畢竟、歷史は神の審判と救濟との計劃の中に含まれてゐる。神の審判や救濟は、神と歷史とが或る程度分離してゐると云ふことを明かにすることなしに理解することは出來ない。これルーテルが神の秩序を極めて堅く執り乍ら、時に人間の恣意による自由なる歷史の歩みを許し、從てまたこれを罰し、これを救濟するといふ關係に於てすべてを豫定の中に統治するといふのである。

四

ルーテルの經濟に關する二樣の見解——農民戰爭論と商業論——について、兩者の間に著しい論旨の相異を見る。前者に於ては、彼は全く反對的な態度を採り續けたが、併し後者の場合には全體として好意に充ち且つ指導的でさへある。これ一見、確に彼の文化觀に於ける顯著なる矛盾である。彼が當時勃興し來る商人階級に特に好意を寄せたのであるとさへ云ふものがある所以である。そこで私はまづこの二つの所論の內容を概括して夫々の特徴を確め、その理由を求めんとして彼の根底的思想に下り、更にその生そのものについて如何に考へるかを尋ねることによつて、初めてそこに一貫せる流れ、共通せる方法の連關を見出した。

ルーテルの生についての考察は、まづその構造に於て「二つの秩序」とも云ふべき對立的・批判的なる方法を

見出し、生の發展については「三つの秩序」とも稱すべき發展的・綜合的なる方法を見出した。そしてこの前者は生の現實について、そこに示されたる矛盾と對立とについて深刻に經驗されたものであり、後者についてはより具體的なる經驗として生は現實のみに限らず、これが發展の途をたどることによつて三つの發展的段階を持つことを見出した。即ち現實の前に創造を、現實の後に榮光を持つことによつて創造――現實――榮光の三段階とした。現實の生はその構造に於て全く矛盾・對立のものではあるが、創造に於ては神の賜物として附與されたる善的統一者である。また神の「啓示」によつて現實的生は救濟され、質的・飛躍的發展を遂げて榮光の世界に入れられることを經驗するのである。かゝる三つの發展段階を持つ「三つの秩序」の方法は即ち現實の段階としての「二つの秩序」の方法を自らその中に含むものである。要するに、ルーテルの綜合的な考へ方の特徴としてはこの最後の「三つの秩序」なる方法である。創造的・發展的な考へといふことに窮まるのである。

かくの如くして農民戰爭論は確にその方法に於て「二つの秩序」の考へ方によつたのであつて、仍ち現實の生に於ける矛盾に對して極めて徹底したる批判的態度を執つたのである。從てまた現實の生に於ける秩序的なる態度と服從とを薦めた。而もなほそこには外的生に對する內的生より來る愛と慰めに基く自由の故に、秩序は自由なる秩序となり、服從は喜べる服從となる途が用意されてゐることがわかる。しかしこれは矢張り次なる「三つの秩序」に至つて初めて眞に理解されるところである。次に商業論は、「三つの秩序」なる方法によつてゐる。即ち彼の思想の特徴が最もよく公平にこゝに現されてゐる。創造を重視することによつて、凡てをその本源に於て神の賜物として享け而もそれを現實に於ては惡化し、而してまた啓示的愛によつて取戻された人間によつて更に取

戻され、以てよりよきものへ飛躍的に發展する希望を有つとするのである。要するにかゝる意味で、商業論の中に農民戰爭論の方法は含まれてゐると見ることが出來る。農民戰爭に對する彼の徹底的なる批判も反對もそれは現實的惡としての農民運動を指してゐるのであつて、その本源に於ける正當なるものゝ場合には彼はよき同情を持つたのであり、眞の方法を用ふることによつてよき解決へと登り得ると信じたのである。

要するにルーテルの經濟觀は、決して單に矛盾したるものとのみ見るべきではなく、ましてや商人階級に故意に好意を寄せたのでは勿論ない。全く統一ある彼の考へ方に貫かれてゐることを知るのである。そしてかゝる表面的には矛盾と見えるが、實は一貫せる思想の體系を有するといふことが、そのことが却て彼の特質をなすとも云はれ得る。かくて彼の經濟觀は、爾餘の類似せる思想殊に最近の諸思想に比しても顯著なるものがあることを示す。農民戰爭論に於ける如き、現實の生に對する「二つの秩序」による批判的態度、そこに現されたるものは云はゞ秩序的經濟觀であり、商業論に於ては「三つの秩序」によつて示されたる創造的・絶對的價値の重視によるよき經濟の考へを提示する。要するにそれは、「生としての經濟」に於て特に愛の裏付と神の秩序とを重んずることにより、深刻なる對立と力强き發展の原理とを持つ經濟觀が、極めて素朴ではあるが、こゝに示されてゐると云ふことが出來よう。